

「平成 23 年度新入生の生活に関する調査」報告 (2) - 大学進学に向けての意識・行動と、就職に向けての意識に 着目して -

望月由起

お茶の水女子大学 学生支援センター

Report on “The research of the life of the new students of 2011”(2) - Focusing on the attitude and actions of students towards entering university and their intentions after graduation -

Yuki MOCHIZUKI

Ochanomizu University Students Support Center

This paper reports the results of the research on the life of the new students of Ochanomizu University and their guardians, focusing on the attitude and actions taken by the students before entering the university, and their consciousness after graduation and the involvement of their guardians.

The main findings are below: 1) Many students selected their target university at an early stage and made use of classes held in high school focusing on entrance exams as well as attending preparatory schools; 2) The reasons for selecting Ochanomizu University were that the university has academic fields that they intended to study, followed by the ambience and environment of the university, and that it is a national university; 3) After graduation, the majority of the students aim to continue their study at a graduate school, and many of them also expect to work as a long-term permanent employee for the first company they enter after leaving university; 4) About 50% of the fathers and about 60% of the mothers are involved in their child's career.

keywords : entering a university, finding employment, guardian's involvement in the child's career

はじめに

お茶の水女子大学学生支援センターでは、平成 23 年度の学部新入生とその保護者を対象に、文部科学省特別経費プロジェクト「統合型学生支援システムの構築による女子高等教育機会の保証」の一環として、「新入生の生活に関する調査」を実施した。本調査は、大学生活の基盤や大学へのニーズを明らかにすることによって、本学の学生・キャリア支援活動をより効果的に実行するための基礎資料として活用することを目的としたものである。

本稿では、本調査の結果について、大学進学に向けての意識や行動特性、就職に向けての意識や保護者の関与に着目して報告する。

「平成 23 年度 新入生の生活に関する調査」(お茶の水女子大学 2011b) からは、本学の新生、その保護者ともに、卒業後の進路に関する支援活動への期待

が特に大きいことが明らかであるとともに、「平成 22 年度 お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」(お茶の水女子大学 2011a) からは、その支援に対して本学の在学生が「足りない」と感じていることも示されている。近年の新規学卒者をめぐる就職環境の厳しさから鑑みても、就職・キャリア支援活動のより一層の充実が急務である。本学における就職・キャリア支援のあり方や方向性を検討する上での示唆を得るためにも、新入生の大学進学に向けての意識・行動特性や、就職に向けての意識などを把握しておくことは重要である。

調査の概要

調査目的：

平成 23 年度本学(学部)入学者の実情をふまえ、有益な学生支援の検討および実施を行うための資料と

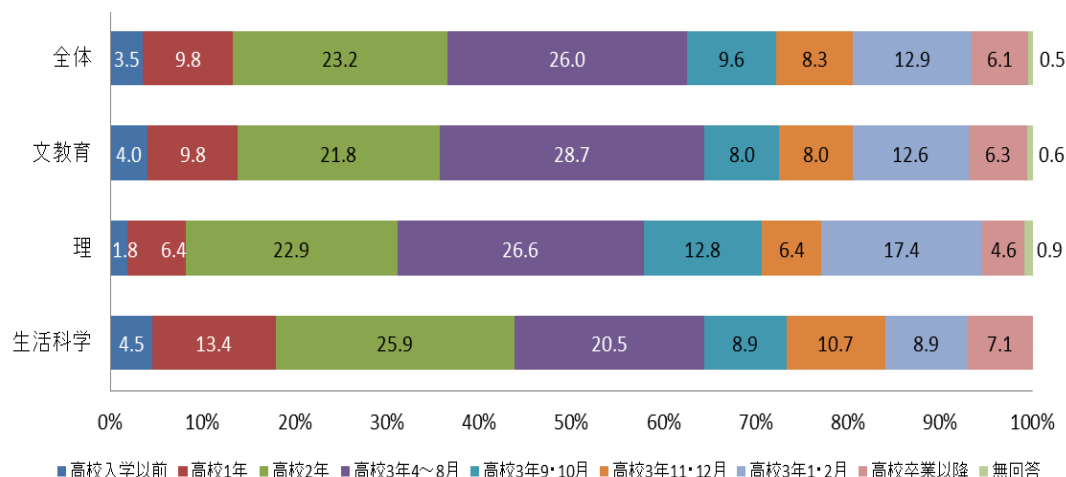


Figure1 本学の受験を決めた時期

することを目的とする。

具体的には、下記4点を中心とする。

1. 新入生個々の大学教育や将来への多様なニーズを把握し、適切な学生支援事業を入学時から行うために、新入生個々の情報を得る。

2. 新入生の標準的な学生生活の状況を把握する。

3. 新入生の家庭状況からその経済的基盤を推定することにより、お茶の水女子大学における学生支援事業を改善するための基礎資料とする。

4. 国立大学入学者の学生生活・家庭状況・進路状況などに関する調査研究を行うための基礎資料とする。

調査時期：

2011年3月。東日本大震災等の影響により、一部の学生は提出締切を4月中旬とした。

調査方法：

原則として、郵送による送付・返送。一般入試合格者、私費外国人留学生に対しては、他の入学手続関係書類に調査票および調査返送用封筒を同封し、他の書類とともに回答の返送を依頼した。その他の方法での合格者に対しては、別途、調査時期に、調査票および調査返送用封筒を送付し、返送を求めた。なお東日本大震災等の影響により提出締切を延長した一部の学生に対しては、直接、学生・キャリア支援チームへの提出を求めた。

調査分析対象：

「新入生の生活に関する調査」としては、「新入生を対象とした調査」と「新入生の保護者を対象とした調査」を行ったが、本稿では、「新入生を対象とした調査」のみを分析対象としている。

平成23年度学部入学者484名。有効回答数396

名（入学者のうち81.8%）。文教育学部174名（同80.6%）、理学部109名（同82.0%）、生活科学部112名（同83.0%）。返送者のうち分析許可を得ることができなかった者は分析対象から除いている。

調査項目：

出身高校、家族、志望動機、進路選択、卒業後の進路志望、学生生活の経済的基礎、学生支援活動への期待など多岐にわたっている。

本学新入生の大学進学に向けての意識・行動特性

まず、本学新入生の大学進学に向けての意識・行動特性として、「本学の受験を決めた時期」「大学受験の対策として利用したもの」「出願した入試方法」「本学以外に合格した大学・学部」「本学の志望・選択理由」「本学の志望の度合」「高校卒業から現在までの間に経験したこと」についてみていく。

本学の受験を決めた時期

本学の受験を決めた時期について、「高校入学以前」「高校1年」「高校2年」「高校卒業以降」に加え、「高校3年」に関しては、その時期を「4～8月」「9・10月」「11・12月」「1・2月」に分けて尋ねた結果がFigure1である。

全体でみると、「高校3年4～8月（26.0%）」が最も多く、次いで「高校2年（23.2%）」が多い。Benesse教育研究開発センターが2008年に実施した「大学生の学習・生活実態調査」によれば（Benesse教育研究開発センター2009,P42）、大学進学を意識し始めた時期は「高校2年生の頃」が最も多く、次いで「高校3年生の頃」である。本学の新入生は、そ

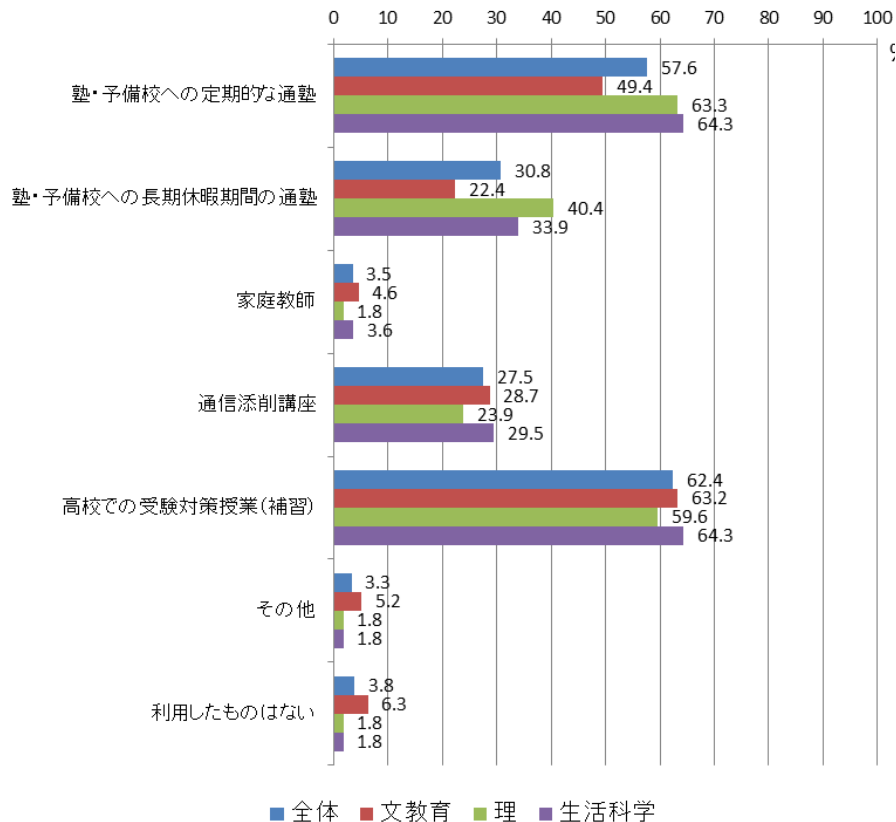


Figure2 大学受験対策として利用したもの

の時期にはすでに本学の受験を決めていた者が多く、全国水準よりも大学進学や受験校を選択・決定した時期が早いことがわかる。

ただし、学部による差異もみられる。理学部では「高校3年1・2月」が17.4%と、センター試験の結果をみてから、本学の受験を決めた者も少なからずいることがうかがえる。その一方で、生活科学部では「高校1年(13.4%)」「高校2年(25.9%)」といった早期の段階から本学の受験を決めていた者も多くみられた。

大学受験対策

Figure2 は、大学受験の対策として利用したものについて、複数回答可として尋ねた結果である。

全体の過半数が「高校での受験対策授業(補習)(62.4%)」や「塾・予備校への定期的な通塾(57.6%)」を利用していたことがわかる。ただし、文教育学部では「塾・予備校への定期的な通塾(49.4%)」や「塾・予備校への長期休暇期間の通塾(22.4%)」が他の学部に対して明らかに低く、「利用したものはない」が6.3%と高いことが示されている。

出願した入試方法

本学の新生が出願した入試方法について、「国公立大学・前期日程」「国公立大学・後期日程」「国公立大学・推薦入試」「国公立大学・AO入試」「私立大学・一般入試」「私立大学・センター入試」「私立大学・推薦入試」「私立大学・AO入試」「その他」から、あてはまるものを複数回答可として尋ねた結果がFigure3である。

全体でみると、国公立大学では、前期日程出願者74.7%、後期日程出願者62.9%、推薦入試出願者27.8%、AO入試出願者6.3%である。私立大学では、一般入試出願者57.1%、センター入試出願者55.6%、推薦入試出願者1.0%、AO入試出願者0.3%であった。

学部別にみると、文教育学部では、国公立大学・前期および後期日程の出願が他学部に対して低いのに対し(前期70.7%、後期58.0%)、生活科学部では、国公立大学への出願が前期(78.6%)、後期(68.8%)、AO(9.8%)と、他学部に対して高い傾向もみられる。

他に合格した大学・学部

では本学の新生は、いかなる大学・学部合格し、本学への入学を決めたのだろうか。本学以外に合格した大学について3大学まで尋ね、延べ人数の上位10

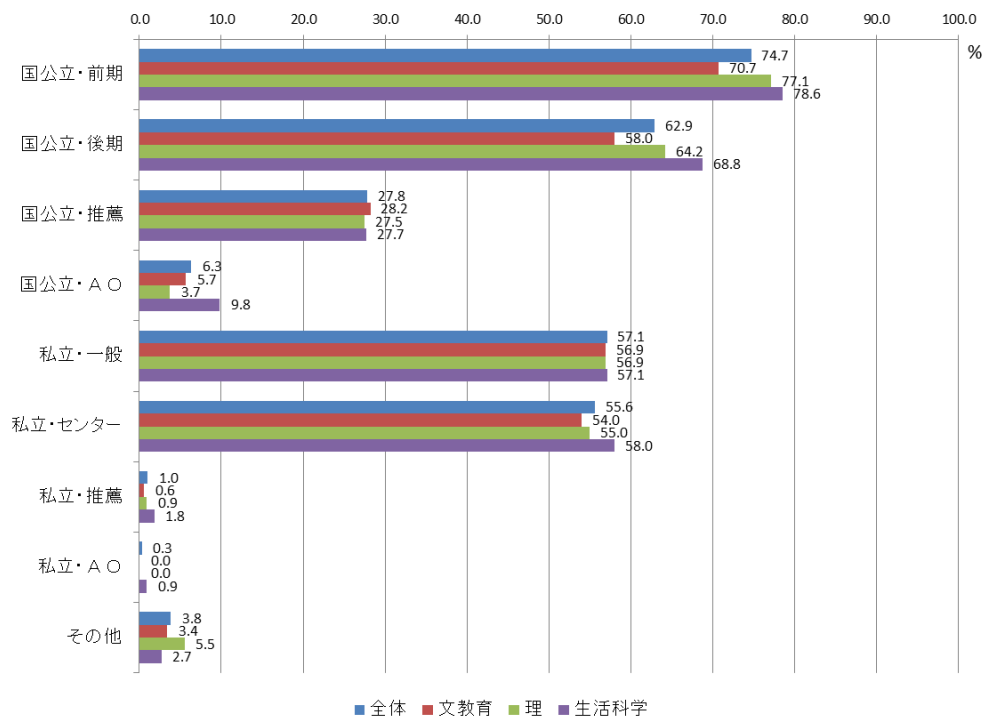


Figure3 出願した入試方法

Table1 本学以外に合格した大学 (人)

全体 (550)		文教育学部 (237)		理学部 (149)		生活科学部 (164)	
早稲田大学	66)	早稲田大学	36)	東京理科大学	32)	早稲田大学	25)
明治大学	66)	明治大学	30)	明治大学	20)	日本女子大学	21)
立教大学	68)	立教大学	24)	立教大学	18)	明治大学	16)
日本女子大学	40)	上智大学	21)	日本女子大学	11)	立教大学	16)
上智大学	38)	津田塾大学	18)	津田塾大学	9)	上智大学	13)
津田塾大学	37)	青山学院大学	17)	青山学院大学	6)	津田塾大学	10)
東京理科大学	37)	中央大学	17)	東京農業大学	6)	青山学院大学	8)
青山学院大学	31)	東京女子大学	8)	学習院大学	5)	中央大学	7)
中央大学	28)	日本女子大学	8)	早稲田大学	5)	慶應義塾大学	6)
慶應義塾大学	16)	法政大学	8)	慶應義塾大学	4)	東京農業大学	6)
				上智大学	4)		
				中央大学	4)		
				東京女子大学	4)		

Table2 本学以外に合格した学部 (人)

全体 (656)		文教育学部 (289)		理学部 (159)		生活科学部 (189)	
文学部	118)	文学部	98)	理学部	64)	家政学部	21)
理学部	66)	学芸学部	18)	理工学部	26)	文学部	20)
学芸学部	37)	法学部	16)	農学部	16)	学芸学部	10)
理工学部	35)	経済学部	11)	学芸学部	9)	薬学部	9)
農学部	26)	現代教養学部	8)	工学部	6)	理工学部	9)
				生命科学部	6)		

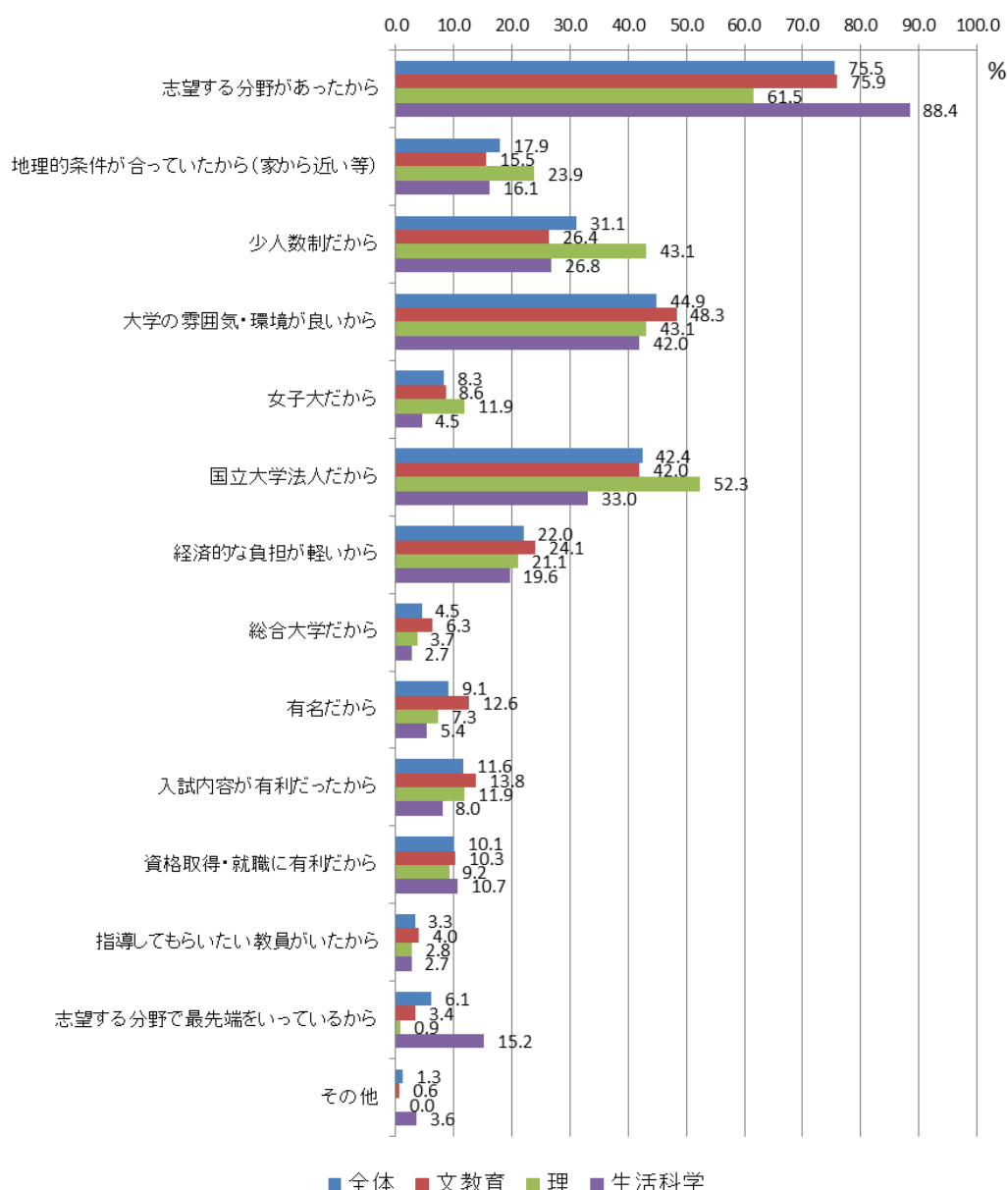


Figure4 本学を選んだ理由 (3 つ以内)

校を示したものが Table1 である。

全体でみると、早稲田大学と明治大学が 66 名と最も多く、続いて立教大学、日本女子大学、上智大学の順になっている。学部別にみると、文教育学部では、早稲田大学が 36 名と最も多く、明治大学、立教大学と続いている。理学部では、東京理科大学が 32 名と明らかに多く、続いて、明治大学、立教大学の順となっている。生活科学では、文教育学部と同様に、早稲田大学が 25 名と最も多いが、それに、日本女子大学、明治大学と立教大学と続く結果となった。

同様に、他に合格した学部について 3 学部まで尋ね、延べ人数の上位 5 学部を示したものが Table2 である。

全体でみると、文学部が 118 名と明らかに多く、続いて理学部、学芸学部、理工学部、農学部の順とな

っている。学部別にみると、文教育学部では、文学部が 98 名と明らかに多く、学芸学部、法学部が続いている。理学部では、理学部が 54 名と明らかに多く、続いて理工学部、農学部の順となっている。生活科学では、家政学部が 21 名と最も多いが、続く文学部も 20 名となり、学芸学部、薬学部、理工学部と続く結果となった。

本学の志望・選択理由

本学の新入生は、なぜ本学を選んだのだろうか。Figure4 は、「お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」(お茶の水女子大学 2011a) を参考に、自分の学力や入試の難易度以外に、本学を選んだ理由について 3 つ以内の回答を求めた結果である。

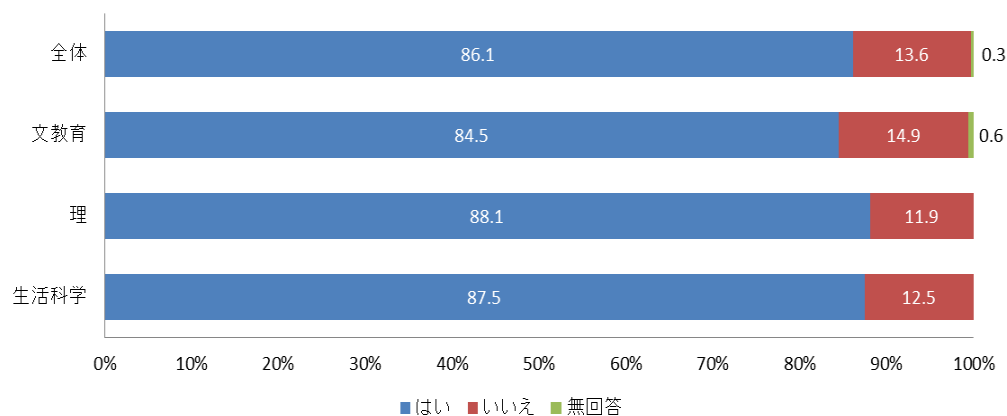


Figure5 本学の第一志望の割合

Table3 高校卒業から現在までの間に経験したこと

	他の高等教育機関に入学した	フルタイムで働いた	浪人した	海外留学をした	この中にはない	無回答
全体	0.5	0.3	11.9	0.8	74.2	12.6
文教育	0.6	0.6	8.6	1.1	74.1	14.9
理	0.9	0.0	9.2	0.9	82.6	7.3
生活科学	0.0	0.0	19.6	0.0	67.0	13.4

全体でみると、「志望する分野があったから（75.5%）」が最も多く、3/4以上の新生が回答している。「大学の雰囲気・環境が良いから（44.9%）」「国立大学法人だから（42.4%）」が続き、およそ半数の新生が回答している。

ただし、学部による差異もみられる。生活科学部では、「志望する分野があったから（88.4%）」が他学部比べて明らかに高く、「国立大学法人だから（33.0%）」は低い。理学部では、「志望する分野があったから（61.5%）」が他学部比べて低く、また、「国立大学法人だから（52.3%）」は「大学の雰囲気・環境が良いから（43.1%）」よりも目立つ。

なお、「お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」によれば、本学を選んだ理由（多項選択・3つ以内）としては、「国立大学法人だから」が7割近くと最も多く、この傾向はいずれの学部でもみられる（お茶の水女子大学2011,P58-59）。先に、理学部では「志望する分野があったから」が他学部比べて低いことを指摘したが、在学生を対象とした「お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」でも同様の傾向が示されている。なお、「平成23年度 新生の生活に関する調査」（お茶の水女子大学2011b,P14）において、自分の学力や入試の難易度以外で本学を選んだ理由として「最も重視したもの」を尋ねた結果からも、同様の傾向が示されている。

本学の志望度合い

本学の新生は本学を第一志望としていたのだろうか。Figure5は、受験時に本学が第一志望であったか否かについて尋ねた結果である。

全体の86.1%が、受験時には本学を第一志望としており、学部別にみても、その比率に大差はみられない。「お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」によれば、本学を第一志望として入学している学部生は、文教育学部67.8%、理学部52.8%、生活科学部76.6%であり（お茶の水女子大学2011,P56）、いずれの学部でも、平成23年度入学者の方が、本学を第一志望とする者の比率が高い結果となっている。

高校卒業後の経験

本学の新生は、高校卒業後にどのような経験をして、本学に入学したのだろうか。高校卒業から現在（調査時期の大学入学前年度3月）までに経験したことについて、「大学生の学習・生活実態調査」を参考に、複数回答可として尋ねた結果がTable3である。

「浪人した」以外の項目は、いずれも全体の1%に満たない、ごくわずかな経験率であり、学部別にみても大差はみられなかった。浪人経験者は、全体の1割を超えているが（11.9%）、学部による差異がみられ、生活科学部ではおよそ2割に及んでいる（19.6%）。

なお、「大学生の学習・生活実態調査」によれば（Benesse教育研究開発センター2009,P26-27）、女

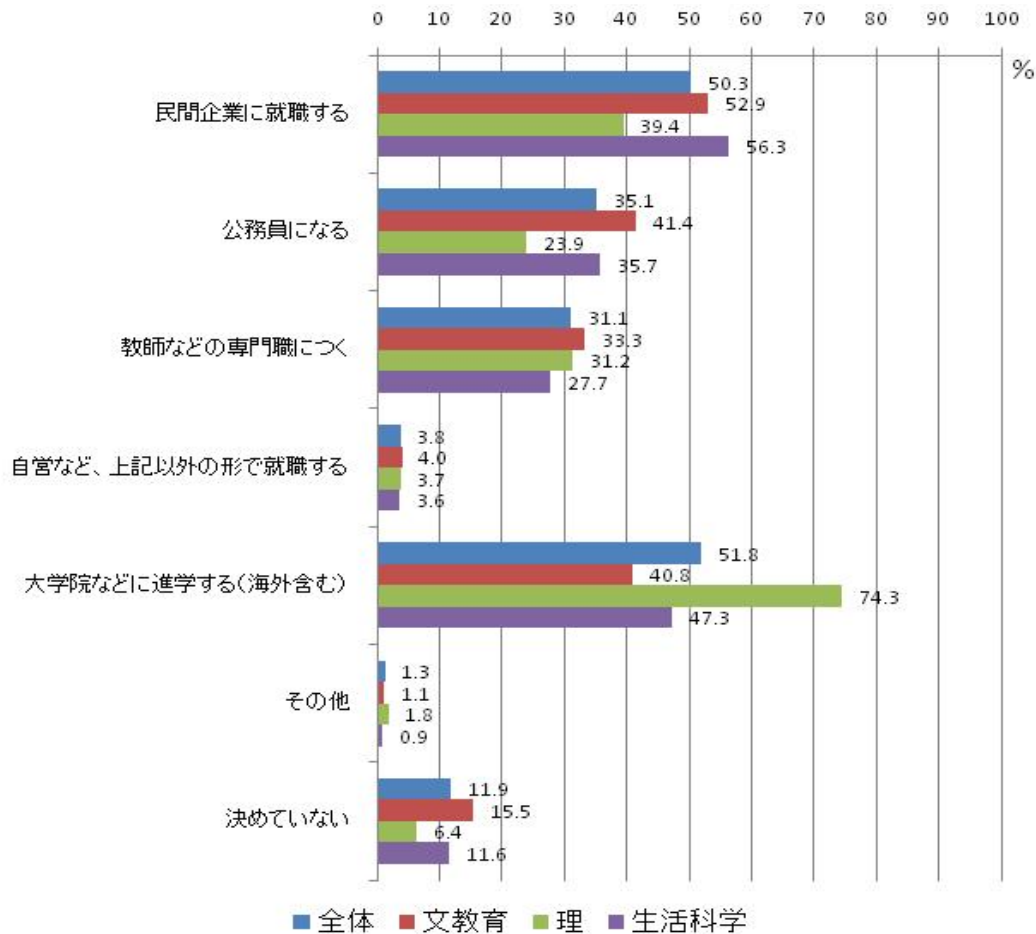


Figure6 大学卒業後の進路希望

子学生の浪人をした経験率は 11.4%、フルタイムで働いた経験率は 0.4%であり、本学新入生の状況に近いことがわかる。これに対し、他の高等教育機関に入学した経験率は 3.2%、海外留学をした経験率は 3.5%に及んでおり、本学新入生の経験率よりも明らかに高い結果が示されている。

就職に向けての意識や保護者の関与

続いて、本学新入生の就職に向けての意識について、「大学卒業後の進路希望」「大学卒業後の進路についての考え（卒業後の就職、就職後の勤務・退職、大学院進学）」から示すとともに、「子どもの就職や将来に関する親の関与」についてもみていく。近年、大学生の就職（活動）に対する保護者の関与が着目されているため、本学での状況についても目を向けておくこととする。

大学卒業後の進路希望

Figure6 は、大学卒業後の進路希望について、「お

茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」を参考に、複数回答可として尋ねたものである。

全体でみると、「大学院などに進学する（海外含む）（51.8%）」がもっとも多いが、学部による差異が大きく、理学部ではおよそ 3/4 に及ぶ一方で（74.3%）、生活科学部や文教育学部では 4 割台にとどまっている（文教育学部 40.8%、生活科学部 47.3%）。ただし「お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」によれば、本学に在学する学部生が大学入学時に「進学」を希望していたのは、理学部でも 51.2%、生活科学部で 24.9%、文教育学部で 20.8%であり（お茶の水女子大学 2011,P50）、今年度の新入生の進路希望とは大きな隔たりもみられる。

また Figure6 からは、「民間企業に就職する（50.3%）」「公務員になる（35.1%）」が「大学院などに進学する（海外含む）」に続くが、理学部は他学部比べて両者ともに低い。

特筆すべき点は、大学入学時点で、卒業後の進路について何らかの希望を持っている者が理学部では他学部比べて多いことである。「決めていない」は全体

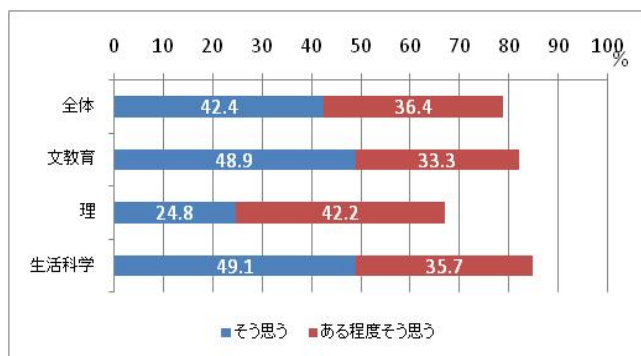


Figure7 すぐに就職して正社員・正規の職員になる

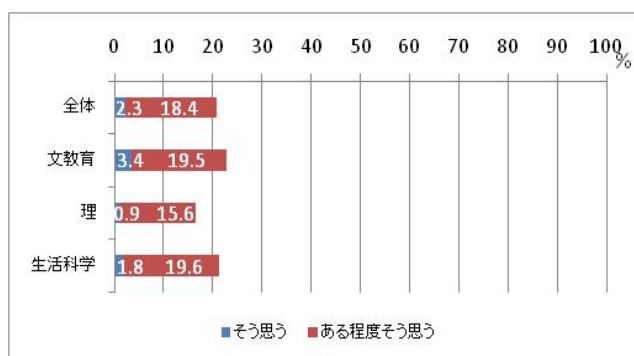


Figure8 すぐに就職するが正社員・正規の職員に拘らない

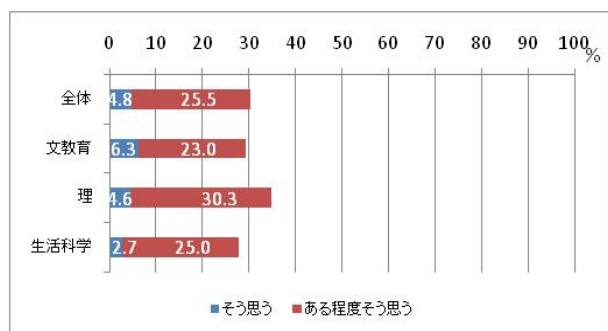


Figure9 資格試験・公務員試験などに合格するまで就職しない

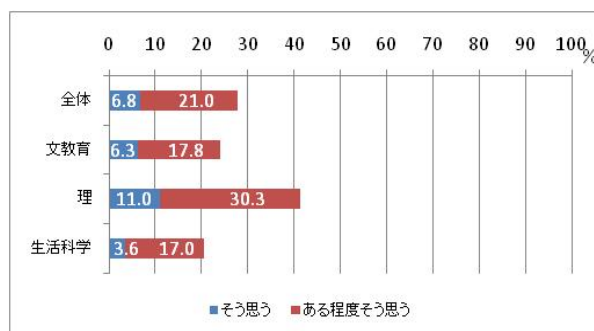


Figure10 卒業後すぐには就職しなくてもよい

の 11.9%みられるが、理学部では 6.4%に過ぎないことが示されている。

大学卒業後の進路についての考え

全国大学生調査コンソーシアム / 東京大学大学経営・政策研究センターが 2007 年に実施した「全国大学生調査」を参考に、「大学卒業後のキャリアについての考え」に関して 3 件法で尋ね、その該当率（「そう思う」＋「ある程度そう思う」）を示した結果が、Figure7 から Figure15 である。以下では、「卒業後の就職」「就職後の勤務・退職」「大学院進学」の 3 つの側面からみていく。

まず Figure7 から Figure10 は、「卒業後の就職」についての考えを尋ねた結果である。

「すぐに就職して正社員・正規の職員になる」「卒業後すぐには就職しなくてもよい」の該当率は学部による差異がみられ、理学部は他学部比べて「すぐに就職して正社員・正規の職員になる（67.0%）」が低く、「卒業後すぐには就職しなくてもよい（41.3%）」が高い。

続いて Figure11 から Figure13 は、「就職後の勤務・退職」についての考えを尋ねた結果である。

いずれの項目も学部による差異は大きくはみられず、全体でみると「最初の就職先にできるだけ長く勤める（87.3%）」はおよそ 9 割に及んでいる。これ

に対して、「何年かして転職や独立をする（39.1%）」や「結婚・出産したら仕事をやめる（30.8%）」の該当率は 3 割台にとどまり、「そう思う」との回答は極めて少数である。

なお「全国大学生調査」においては、「何年かして転職や独立をする」が 55.1%であり、本学新入生の該当率の低さがいずれの学部においてもうかがえる。

最後に Figure14 および Figure15 は、「大学院進学」についての考えを尋ねた結果である。

「すぐに大学院などに進学する（69.5%）」は、全体でみればおよそ 7 割であるが、学部による差異があり、理学部は 87.2%と他学部比べて高い。これに対し「就職してから大学院への進学を考える」は、学部による大きな差異はみられなかった。

なお「全国大学生調査」においては、「すぐに大学院などに進学する」が 45.7%であり、本学新入生の該当率の高さがいずれの学部においてもうかがえる。

就職や将来の進路に対する親の関与

最後に、本学の新入生の就職や将来の進路について、両親がどの程度関与しているのかについてみていく。

Figure16 は、就職や将来に関する父親の関与について 5 件法で尋ねた結果である。

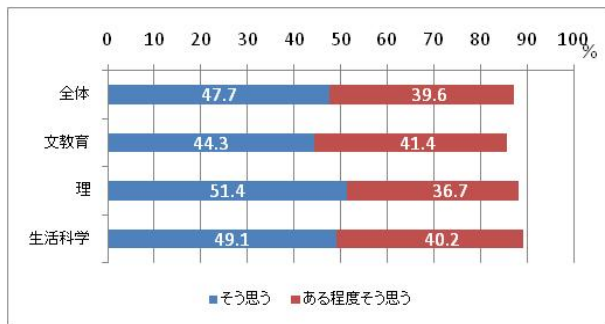


Figure11 最初の就職先にできるだけ長く勤める

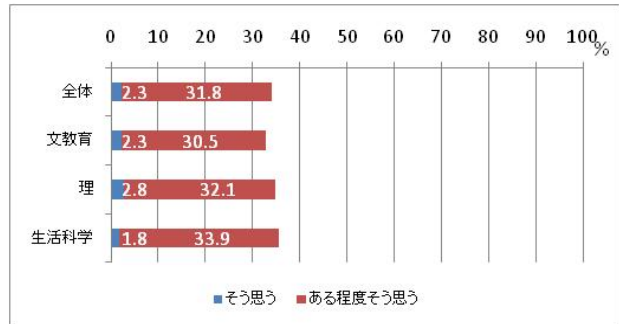


Figure12 何年かして転職や独立をする

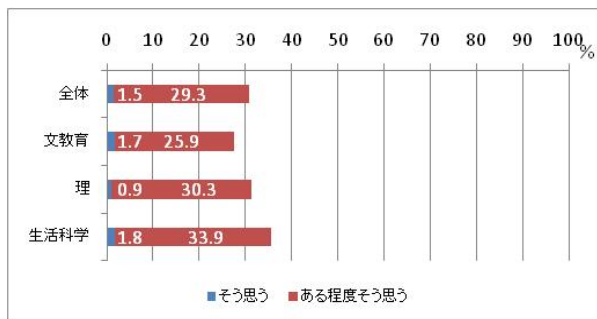


Figure13 結婚・出産したら仕事をやめる

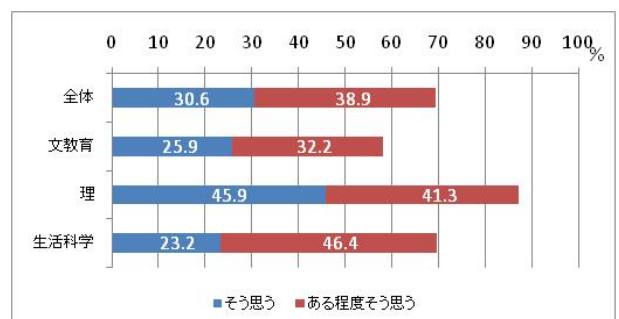


Figure14 すぐに大学院などに進学する

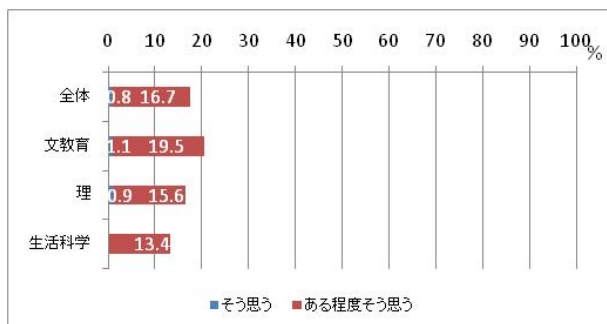


Figure15 就職してから大学院への進学を考える

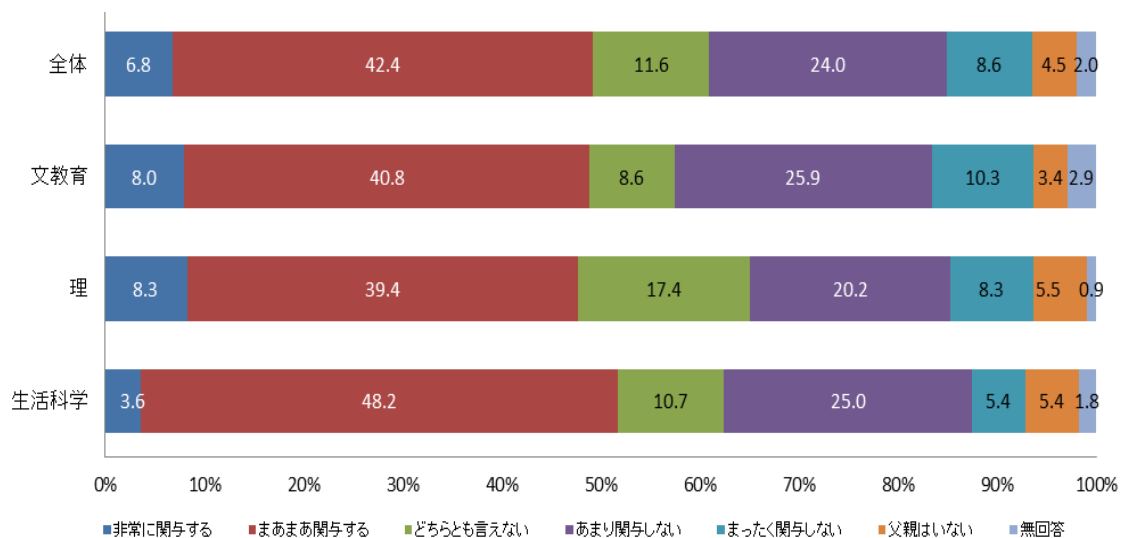


Figure16 就職や将来のことに関する父親の関与

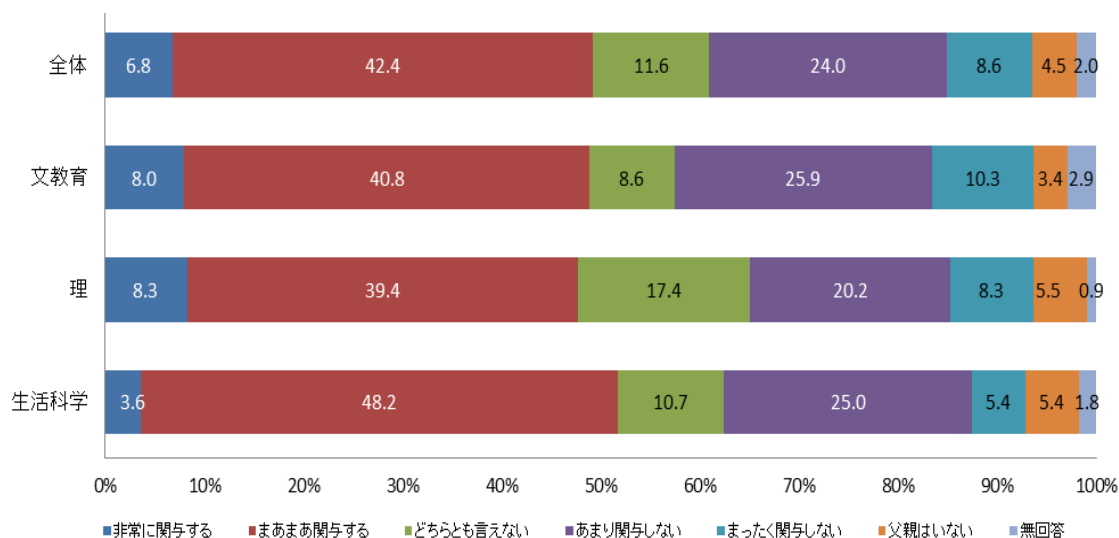


Figure17 就職や将来のことに関する母親の関与

本学の新入生は、全体の約半数（49.2％）が、就職や将来のことに関する父親の関与が「非常に」あるいは「まあまあ」と回答しており、学部別にみても大差はみられない。

同様に Figure17 は、就職や将来の関する母親の関与について 5 件法で尋ねた結果である。

本学の新入生は、全体の約 6 割（60.1％）が、就職や将来のことに関する母親の関与が「非常に」あるいは「まあまあ」と回答しており、父親の場合同様、学部別にみても大差はみられなかった。

おわりに

本稿からは、本学の新入生は、早期から受験校を決定し、「高校の受験対策授業」や「塾・予備校への通塾」による受験対策をしていた者が多いことがわかった。また、早稲田大学、明治大学、立教大学、日本女子大学などにも合格しており、「志望する分野」「大学の雰囲気・環境」「国立大学」を理由に本学を選択した者が多いことも示されている。また、高校卒業後、他の高等教育機関への入学や海外留学の経験なく、本学へ入学している学生が全国水準と比べて多いことも特徴である。これらの結果からは、本学の新入生は大学進学に向けての意識が高く、その目的に向かって一直線に進んできた学生が多いものと思われる。

卒業後は、「大学院などへの進学」希望者が、学部による差異傾向がみられるものの過半数におよんでおり、正規雇用で、最初の就職先に長く勤めたいと考えている学生も全体的意に多くみられた。また、父親の約半数、母親の約 6 割が、子どもの就職や将来の進

路に関与している点も特筆すべきであろう。この点をふまえ、本学では、保護者の存在も視野に入れ、保護者とともに支援にあたるのが有益な就職・キャリア支援につながるものと思われる。

参考文献

- Benesse 教育研究開発センター（2009）「大学生の学習・生活実態調査報告書」
- お茶の水女子大学（2011a）「平成 22 年度 お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」
- お茶の水女子大学（2011b）「平成 23 年度 新入生の生活に関する調査」
- 全国大学生調査コンソーシアム / 東京大学 大学経営・政策研究センター（2008）「全国大学生調査 第一次～第三次調査 基礎集計表」
http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/kiso2008_01.pdf
- ※ 本調査の報告書は学生・キャリア支援チームで冊子を手でできるほか、TeaPot から PDF 形式でダウンロードいただけます
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/50935>
- ※ 報告書の一部は、学生支援センターホームページ内「調査結果のご報告」にて、「Research Report」として紹介しております。
http://www.ocha.ac.jp/gss/support_center/research/index.html

2012 年 2 月 27 日 受稿
 教育機構実施調査により受理